

# 台湾における立正佼成会式先祖供養の抱える困難

——台湾の祖先祭祀と双系の先祖・「総戒名」の葛藤——

渡 辺 雅 子

## はじめに

台湾の人口は2021年時点で約2,300万人、民族構成としては漢民族が98% (福佬人74%、客家人12%、外省人12%)で2%が先住民族である。

台湾での日系新宗教の受容にあたって、日本の植民地時代に日本語教育を受けた日本語世代(日本語人)<sup>(1)</sup>の役割は大きかった。日本語世代の死去や高齢化によって、日系新宗教の各教団は世代交代の課題をかかえている。

台湾には様々な日系新宗教が入っているが、筆者は立正佼成会(以下、佼成会)について、その展開過程を渡辺・廣瀬 2021で明らかにした。佼成会は庭野日敬(開祖, 1906-1999)と長沼妙佼(脇祖, 1889-1957)を創立者として、1938年に霊友会から分派して東京都で設立された法華系の新宗教教団で、現在の会長は庭野日鏡である。

台湾の佼成会には三つの日本の教会の系統があり、屏東・高雄(東京の目黒教会系統)は1967年、台北(東京の豊田教会系統)は1971年、台南(秋田の大館教会系統)は1975年から布教が始まった。1992年に法人格を取得し、三系統をまとめて中華在家仏教立正佼成会(台湾教会)になり、2006年に三法人への分裂後、2008年に台北教会、台南教会(屏東・高雄は台南教会に所属)の二つの教会ができた。この論文ではどのような道筋をとって佼成会の教えが広まっていったのか、受容層はどのような人々か、法人格取得への道筋、日本の本部との関係、活動の様相などについて、さまざまな資料と聞き取り調査によって跡づけた。

当該論文は歴史的展開過程に焦点をあてたため、現地的要素の採用の実態、宗教文化の相違による違和感によって受け入れにくいものといった文化的要素については言及できなかった。日本語世代の時には、さほど違和感がなく受け入れられていたものも、世代が変わると受け入れにくくなっているものもある。佼成会の日本語世代の主要人物は1920年代の生まれで、生きていれば100歳前後の年代で、彼らの多くは死去し、または超高齢化の段階にあり転換期をむかえている。文化的にも日本の教育を受けた日本語世代とその後の世代とは感覚自体も違っている。

本稿ではまず台湾の宗教文化の特徴について述べ、次いで佼成会でその要素をどのように取り入れているかについて言及する。そして佼成会の教えや実践でわかりにくいところ、文化的に違和感をいだく点について、聞き取り調査を通じ、台湾の信者の視点からみていく。

本稿で特に焦点をあてるのは、台湾の祖先祭祀と佼成会式先祖供養にかかわるものである。台湾では祖先祭祀が文化の中に組み込まれ、重要な位置づけを担うが、佼成会の双系の先祖という概念やそれを象徴する「総戒名」という装置が受け入れにくいのである。

## 1 台湾の宗教文化と現地様式の採用・文化的違和感

### (1) 台湾の宗教文化

台湾の宗教的な背景は、主に道教と仏教である。台湾には17,000強の寺廟・教会があり、そのうちの7割は道教色の強い寺廟で、仏教色が強い寺廟は約15%である。道教とは道家思想を基盤に陰陽五行説や易、占星術などを吸収し、儒教や仏教の儀礼や思想をとりいれながら成立した、不老長生を求める中国土着の宗教である。

苦難除去、開運など幅広いご利益があるとされる「観世音菩薩(観音菩薩)」

は台湾で広く信仰を集めている。例えば、台北の龍山寺は観音菩薩を主神とする仏教寺院であるが、厄払いに多くの人が訪れる(写真1)。また、仏教寺院とはいえ、非仏教系の神明も多く祀っており、なかでも「文昌帝」(学問成就に靈驗あらたかな神)、「媽祖(天上聖母)」(良縁、子授け、道中安全など幅広いご利益があるとされる)、「閩帝」(武勇と忠義でしられる『三国志演義』の武将閩羽が神格化したもの。商売繁盛の神)が有名である。寺廟は神仏を媒介として民衆の願いに応える場であり、台湾の神仏は人々の暮らしに密着した願いや悩みに答えること、すなわち現世利益が求められる。台湾の宗教は仏教と道教の混淆であり、また、仏教徒であるからといって媽祖や閩帝を拝まないわけではない。人々は現世利益の希求に基づいて、神仏の素性を問わずに靈驗あらたかな神仏に祈る。現世利益を核に各宗教が混淆したところに台湾の宗教の特徴がある。ただし、神仏への祈願には靈驗への返礼を提示することが必要であり、神仏もその返礼をみて靈驗を約束する。つまり人と神仏は契約関係にあるのである。また、寺廟には「筊杯(ポエ)」と呼ばれる半月形の厚みのある一對の占いの道具があり、人々はそれを投げて神意を伺う。対の杯が裏表になれば「よろしい」、表表や裏裏になればよろしくないという神意をあらわす(上水流 1998 : 69-82)。

台湾の寺廟はきらびやかである。また、寺廟には光明燈が設置されており、布施をすることによって1年間、自分の名前を書いて、小さな神像が入っているものにライトがともされ、神仏の加護がうけられるとされる。これは寺廟の大きな収入となっている。よい場所であればその金額も高い(写真2)。

祈願の対象は道教の神(神像)ばかりではなく仏像にも盛んに祈願を捧げる。異なる機能に応じて熱心に拝まれていて、線香の香華が絶えることはない。仏像は「像」で表現されるが、仏教系でない他の神々も特定の「像」で表現され、しかも人の形が最も多い<sup>(2)</sup>(植松 1989 : 451)。

台湾における立正佼成会式先祖供養の抱える困難



写真1 台北の龍山寺で祈願する人々 [筆者撮影]  
手に持っているのは線香。

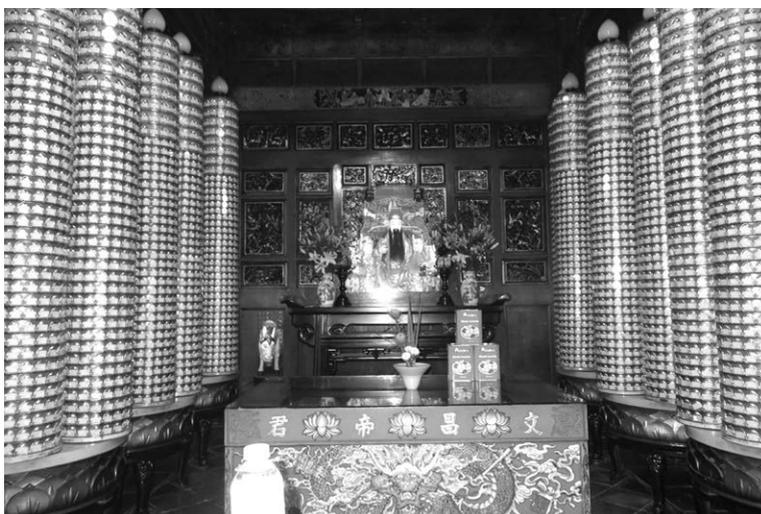


写真2 龍山寺にある学問の神の文昌帝を祀る廟の左右にある光明燈 [筆者撮影]

## (2) 台湾の佼成会での現地様式の採用

佼成会の台北教会では、教会に観音菩薩を祀った部屋がある(写真3)。これは1996年に法座所ができた時からあり、その後、場所を移転しても継続して設置されている。佼成会の命日は1日(初命日、朔日参り)、4日(開祖命日)、10日(脇祖命日)、15日(釈迦牟尼仏命日、布薩の日)であるが、それに加えて台北教会独自に25日を観音命日としている。これは、法華経の「観世音菩薩普門品第二十五」にちなんでいる。この日は観音経をあげるが、大きな行事以外の毎月命日の中では、観音命日が一番多く参拝者が集まる。またこの日には陀羅尼をあげ、祈願供養を行う。観音の部屋には左右に約400の光明燈が設置されている。これは台湾の寺廟には必ずあるもので、無病息災を祈願する。台北教会では中元節(盂蘭盆会)での布施とともに教会の収入の大きな部分を占めている。また、台北教会の本尊は極彩色本尊である(写真4)。これは国内海外ともに他所ではみられないもので、会員のたつての希望によるものである。台湾の寺廟では仏像や神像はきらびやかである。

台南教会には台北教会のような独立した観音菩薩の部屋はないが、毎月19日を観音命日として、観音経をあげている。25日は教会設立記念日なので、それを避け、観音菩薩の誕生日とされる旧暦2月19日にちなんで、19日を観音命日としている。台南教会の宝前(仏壇)は、本尊(金色)が安置された背景の壁の色は台湾人が好む赤(朱色)である。この色の採用も国内外ともに類例がない。宝前の左右両脇には光明燈がある。2003年に現在の教会道場に移転した際に会員の発案によって、寄付をつのって光明燈を設置した(写真5)。光明燈が教会にあると、それがあること自体で安心し、その中に個人の名前が入っているので、常に守られているという感じがするという。

台北教会では会員以外の人にも光明燈を宣伝し、会員の親戚や知人も申し込んでいる。大きな寺では観音に近づきにくいだが、台北教会では観音の部屋に光



写真3 台北教会の観音菩薩を祀っている部屋 [筆者撮影]  
部屋の左右に光明燈が設置されている。



写真4 台北教会の宝前(仏壇) [筆者撮影]  
極彩色本尊が安置されている。左右の写真は向かって左が開祖庭野日敬, 右が脇祖  
長沼妙俊。



写真5 台南教会の宝前(仏壇) [筆者撮影]

本尊の色は金色。背景の壁は朱赤。左右には光明燈がある(写真の右端のものが左にもある)。

明燈があるので、観音像との距離が近いことが魅力であるという。台南教会は宣伝もしていないがわずかに会員でない人もいる。光明燈の収入は教会の運営費として大きなものを占める。

日々の読経供養に用いる法華三部経から抜粋して編集された「経典」は台湾語のものを使用している。法華三部経の経典は北京語である。開祖庭野日敬と脇祖長沼妙俊の写真は宝前の左右に掲げられている。2008年に台南教会になった時に、長沼妙俊の写真のを和服の写真から洋服に着せ替えたものに変えた。日本風が良い悪いではなく、新しい人が来た時に和服だと日本の宗教というイメージがあるので、洋服にしたほうが入りやすいのではないかという理由による。台北教会では台南教会に遅れて信者からの提案で洋服に変えた<sup>(3)</sup>。

### (3) 文化的違和感の存在

佼成会は日本から来た宗教なので、台湾の文化から見ると違和感があるところが

ある。日本の佼成会では教会での読経供養に際して、導師・脇導師は、黒の礼服を着る。台湾では葬式を思いおこさせる縁起が悪い色として黒が好まれない。黒服に違和感がある人がいるが、現在では日本式の礼服ではないが、様々なデザインで、色は黒というかたちで対応している。今は慣れたとのことである。寺では線香をあげるが、佼成会では線香をあげないので、あげたいという希望がある。また寺で説法するのは出家者だが、佼成会では在家信者が行うので、これにも違和感がある。

台北と台南を比べると台南の方が伝統的・保守的であるというが、台南教会の男性幹部会員(70代の理事長経験者)は、次のように佼成会と台湾の宗教の違いを語っている。「台湾では廟や寺はお参りして拝むだけなので、佼成会のよいところはみんなで一緒にお経をあげられることだ。ご供養は荘厳でよい。台湾では一般に自宅でご供養する(お経をあげる)習慣はないが、線香は毎日あげる。教会に来て線香をあげたいという声もあがっている。佼成会が台湾の文化との関係で採用したらよいものは、線香、お守り、厄払いだ。」また、次のように台湾の寺廟と佼成会の違いについて語る男性幹部会員がいる。「台湾にはいろいろな神様がいる。また寺や廟では神仏の像は色鮮やかなので、佼成会の本尊は色が少ないし、さびしい(注：台南教会の本尊は金色一色である)。佼成会では神頼みではなく、日々の生活の中で祈る。佼成会ではご利益のことはあまり考えない。どの宗教でも神通力があるというのが台湾の信仰の原点だが、佼成会は神通力を言わないので魅力がない。」「佼成会は拝めばなんでもかなえてくれるというのではなく、苦しい時には教会に行ってお経をあげ、経典中の言葉でコツコツ努力して自分が変わればよくなっていくというのが佼成会の教えだと思う。こういう佼成会なので、新しい会員を導くことは難しい。寺廟には拝みに行く。厄払いをしてくれる。台湾では靈感が強い人がはやっている。佼成会式のあなたが変われば(状況も変わる)というのはとても難しい。佼成会では日常の生活実践を大切にしているが、これだと台湾の人はできない。」

「法座」は小集団で円座になって行われる「法を中心とした語り合いの場」

で佼成会の重要な活動であるが、これが難しいという。「台湾人は悩み苦しみを人前で言わない。自分の悩みは神仏に訴える。擲筊(ポアポエ/ポエ占い)で神仏に聞く。擲筊は願い事を神仏に問う際に、赤い三日月型をした「筊杯」の木片二つを床に投げると、神や仏がその願望に対して裏表の四つのパターンで返事をしてくれる。これで神仏と対話する。占いに頼る。それによって神仏に聞いてもらったと思う。また、寺や廟には願かけや、拝みに行く。したがって法座では台湾の場合は根っこの部分でさらけ出すことはできないので、日本のようにはできない」という。また、法座が政治問題のディスカッションになってしまうこともあるとのことである。

「台湾では(出家した)僧を尊敬するし、説法という出家した僧がやるものと思っている。佼成会では教義を教え、説法をするのが在家なので、あまり力がないと受けとめられる」と言及する人もいる。

台湾では線香は神仏に対して仏壇に毎日あげるが、家でお経をあげる習慣はない。寺や廟では毎日読経供養するということはないので、台湾人にとって魅力は教会で一緒にあげるお経である。

しかし、総戒名の問題、これが一番大きいと指摘する人は多い。総戒名の自宅への祀りこみについて忌避感のある人が多いのである。それではなぜ総戒名が問題になるのかについて、台湾の祖先祭祀とも関連して検討しておこう。日本語世代の時は受け入れられていたようだが、現在では総戒名については違和感を持っている人が多く、受け入れられないと明言する人もいる。祖先祭祀を重要視する台湾社会において、いかなる点が相克しているのだろうか。

## 2 台湾の祖先祭祀と佼成会式先祖供養の葛藤

### (1) 佼成会の先祖供養の特徴

台湾には祖先祭祀を重要視する文化があるが、佼成会の場合も基本的な重要

な宗教実践に先祖供養があり、その手掛かりとするのが総戒名である。日本では、佼成会に入会するとまず、総戒名を祀りこむ。飯水茶をあげ、これに合掌礼拝して朝晩読経供養をすることが修行として欠かせないものとされる。佼成会の先祖供養の特徴は、日本の伝統的な父系のイエ的単系的先祖ではなく、双系的先祖である。総戒名とは、父方(夫方)、母方(妻方)の両家の先祖すべてを象徴する礼拝対象で、日本では「誦生院法道慈善施先祖○○家徳起菩提心」と書かれており、上(縦書きなので右)の○○家の箇所に父方(夫方)の姓を、下(同左)には母方(妻方)の姓を書く。この総戒名を自宅に祀ることが極めて難しいのである。

なお、2008年からは創立70周年を機に、額装本尊が単体の総戒名に変わって授与されるようになった、絵像の本尊の写真、総戒名、開祖・脇祖の法号、宅地因縁がセットになったもので、教会勧請本尊とも言われる(より上位の像の本尊は本部勧請本尊)。法号とは佼成会の創立者の開祖庭野日敬、脇祖長沼妙俊に対しておくられた戒名(法名)に代わる尊称で、開祖庭野日敬一乗大師、脇祖妙俊慈道菩薩とある。

宅地因縁はほぼ問題なく受け入れられるが、総戒名、法号を受け入れるのが難しい。絵像の本尊も先述したように、台湾では崇拜対象は像であるため、絵像の写真はありがたいと思にくい。佼成会の場合は、祖先を祭祀するというより、祖先に対する法華経による読経供養に主眼がある。台湾では祖先の位牌に対して線香をあげるが、自宅で読経する習慣はない。自分の好きな時に寺廟に行き、線香を拝げたり読経をするのがあたりまえなので、教会で読経供養するのは好むが、よほど熱心な人でないと朝夕の読経供養を自宅でする人は少ない。

東アジアにおいて祖先祭祀は特徴的にみられるものであるが、その様相は国によって異なる。それでは次に東アジアの祖先祭祀、そして台湾の漢人社会の祖先祭祀について概観しよう。

## (2) 東アジアの祖先祭祀

渡邊欣雄は、祖先祭祀は世界に普遍的にみられるものではなく、アフリカやオセアニアの一部を除いて、東アジア地域の諸文化の特徴の一つとされたものであることを指摘している(渡邊 1989 : 13-23)。そして、その特徴を以下のように述べている。祖先祭祀は、「ある集団の現成員の生活に死亡したかつての成員が影響を及ぼす、または及ぼすことができるという信仰に基づく宗教体系である」。そして「祖先祭祀とは祖先を含む一定の靈魂観に基づいて、特定子孫による独特な祖先の象徴物に対して行なうところの、限定された儀礼的行為である」という。祖先祭祀について、渡邊はその条件として以下のものをあげている。「祖先」は人間の「正常な」死をもってその資格の必要条件が整えられ、自分を祀るべき子孫を持つ存在でなければならない。それも子孫のうちでも「特定の」子孫によって祀られなければならない。また、祖先は毎年恒例の特定の<sup>ママ</sup>記念祭や慰霊祭によって祀られ続けなければならない。記念祭や慰霊祭も特定の供物、特定の祭具、特定の道徳的儀礼行為で応じなければならない。さらに祭場も特定の場でなければならない。これらの条件が満たされないと、祖先は祖先としての資格を失い、秩序なき世界に彷徨して<sup>へんげ</sup>変化し、あるいは現成員に災いや危害を加える存在に転化していく。

祖先祭祀には祖先を祀るための特定の子孫の祭祀組織がある。それは祖先を祀る子孫を限定し、祖先との独特な宗教=法的関係において「選ばれた」子孫の特権と責務が付与された組織なのである。

東アジアでは父祖を祀ることを原則としており、子孫も(原則として)父系出自集団を構成している。台湾では父系出自の原則は姓にしたがうので、祖先と同姓の子孫たちが「同等」の権利・義務において祖先祭祀を行っている。

それでは次に台湾における漢人社会の祖先祭祀の特徴についてみていこう。

### (3) 台湾漢人社会の祖先祭祀

上述したように、祖先祭祀は東アジアに特徴的なものだが、各々の地域によって特徴がある。台湾の漢人社会の祖先祭祀について、植野 1989、堀江 1989、渡邊 1991を参考にして、その特徴を述べよう。理念型としては以下のとおりである。なお、現在は台湾社会も少子化、未婚化もすすんでおり、伝統的な祖先祭祀を貫徹するには難しい状況も生じている。

#### 父子子孫による祭祀

台湾の漢人社会では、祖先はその父子子孫によって祭祀されるのが原則であり、子孫が絶えることなく続き、祖先の祭祀が継続されていくことが重視され、そのためには息子を得ることが親として祖先に対する第一の義務とされる<sup>(4)</sup>。祖先は墓に葬られ、位牌にその名を記され祭祀されていく。子孫たちは位牌に対しては日々線香をあげ、大晦日・元旦・清明節・端午節・中元節・中秋節などの祭日と命日に供物をささげ、また清明節に墓参をする。

祖先祭祀に際しては、父系的に関連する親族員の間に協同的関係がみられ、祖先祭祀組織が形成される。同じ家屋内、あるいは同じ屋敷内に住む父系的に関連する複数家族が協同して祖先祭祀を行う。また、居住を別とする場合にも祖先祭祀の協同がみられる。このような祖先祭祀に際しては、「宗族」と称される父系出自集団があり、その成員によって協同して共通の父系祖先に対する祭祀が行われる。

もう一つの特徴は、父系の男性子孫出自集団内において系譜の本支関係に基づく差異が存在しないという点である。これは「男子均分相続制」と関連し、すべての息子は親の財産に対して同様の権利を持ち、親の財産は兄弟の間で平等に分割され、また親の老後の扶養義務は兄弟の間で同等である。親の死後の祭祀についても同様の義務を負う。祭祀の義務は息子全員において平等であり、

その義務はさらにその息子たちに平等に継承されていく。分家をしてでも祖先祭祀や親の扶養に対しては協同性をもっている。したがって、日本の家制度において、祖先祭祀の義務が本家に集中するのは全く異なっている。

それでは、女性と祖先祭祀についてはどうだろうか。女性は婚前は生家の、結婚後は婚家の祭祀の家の中の庁(家屋の中心部にある神や祖先を祭祀する部屋。神像や神画、位牌が置かれている)の祖先祭祀は行いが、宗祠での祭祀には関与しない。女子は生家の財産相続の権利がないが、生家の祖先祭祀の義務もない。また、女性は必ず婚出しなくてはならないと考えられており、未婚で死亡した場合も生家で祖先として祀られることはない。女性の最終的な帰属先は婚家で、そこで子孫を得ることによって死後は夫とともに祖先として祭祀されていく。漢民族の伝統的親族観念においては、女性は必ず婚出していくべき存在であるとされる(植野 2011:99)。

なお、台湾では急激な人口移動によって以前のように父系的関係者が集住しなくなってきたが、兄弟によって協同で祖先祭祀がなされていることには変わりはないという。

### 漢民族の靈魂観

台湾の祖先祭祀を理解するにあたって、漢民族の靈魂観について理解することも肝要であろう。渡邊によると、①「魂魄<sup>こんぱく</sup>」の観念があり、魂は「陽祖」となり、魄は「陰祖」となって子孫に対して違った影響力を行使する。②祖先は子孫の対応いかんで別のカテゴリーとしての「神」ともなりうるが、「鬼」にもなりうる。③漢民族の出自集団は父系的に関係づけられる子孫たちの集団である。夫方居住を原則とする漢民族の間では、女性は結婚後夫方に属して家族を形成するが姓の変更がないと同様に、生家との関係は維持されるが、位牌の中では女性は完全に婚家のメンバーであって生家の祖先ではない(渡邊 1991:134)。

祖先を漢民族の宗教的宇宙においてとらえると、神霊界と人間界がある。祖

先の世界は父系子孫とその妻によって祀られる死後の世界である。子孫が定期的に祖先を祀るならば、祖先は子孫の繁栄を保証する。ただし、宗族の成員としての条件に反する者、すなわち夭折した者、未婚の女性、子供のない者、他の親族員(他人)、横死した者はみな原則上祖先ではなく、鬼魂(鬼)である。父系祖先とその妻以外の死者の霊は祖先ではないので、子孫に祀る義務はない。自分の属さない他の宗族にとっての祖先はみな鬼魂である。つまり、祖先の秩序の中にない存在はみな鬼魂なのである。神や祖先は人間に祀られ続けている限り、人間に利益や繁栄、あるいは庇護を与える尊敬し崇拝されるべき存在だが、鬼魂は人間に不幸をもたらす。祖先は神明(神)および鬼魂(鬼)との関係の中で祖先でありえる。一定の条件が満たされなければ鬼魂のカテゴリーに変化し、条件が加われば神明にも変化する(渡邊 1991 : 137-138)。

また、植松によると、墓(骨)と位牌(神主碑、靈魂)という儀礼装置を通して、子孫によって祭祀され続ける祖先は、陰間にすむ鬼の一種でありながら子孫を守護する善神的存在となる。骨甕にも位牌にも姓名は記載され続け、祖先は抽象的な祖先融合体になるのではなく、個性を持ち続ける。これは、弔いあげという儀礼により、死者は先祖という融合体に合一するという日本の場合と異なる(植松 1989 : 456)。

正当祭祀者(父系男性子孫)が存在する場合は、祭祀され続け、あの世における生活が保護され、一定のプロセスを経て祖先となる。正当祭祀者がいない死者は鬼として怖れられる存在になる。未婚の死者は問題になる。男性の場合は位牌にその名をとどめ、養子を得て祭祀してもらうことが可能だが、女性の場合はこの方法はとられず、位牌も遺骨も正当な祭祀場所をもたず、冥界をさまようことになる。そこで冥界をさまよう女鬼に配偶者を求めて安定させる冥婚がかつてしばしば行われていたが、現在はこの方法は少なくなり、寺院に遺骨や位牌を預ける方法が多くとられている(植松 1989 : 456-457)。

祖先になれない死者は孤魂、鬼と呼ばれ、怖れられ、これらの危害から逃れ

るために、彼らに生活物資を施す。中でも最も大きな定期的行事が陰暦7月に行われる中元節で、餓鬼への供物は夕方から戸外の臨時祭壇に供える。中元節は祖先の祭祀は午前中(陽の時間)に、餓鬼への祭祀は夕(陰の時間)に行われる。

## 位牌

次に祖先祭祀の重要な装置としての位牌についてみておこう。堀江によると位牌の形態は時代や統治者に違いによって変化しているが、形態上三つに分類できる。第一の型は漢民族の伝統的形態とされる「神位牌」ないし「木主牌」と呼ばれる個人単位の位牌である。第二の型は日本統治時代に日本の影響下に生れたとされる、複数の祖先を一つの位牌に合祀したものである。小型の龕かんの形をしており、表には中央に「○姓歴代祖先牌位」、左下に「陽世子孫奉祀」等と記される。背部は開けられるようになっており、中には個々の祖先の諱名、命日を記した木片が入っている。第三の型は二つの混合型で、大型の板状の位牌に複数の祖先を合祀したもので、表には歴代祖先の諱名、裏には各々の俗名・誕生日・命日等が記されている。第二と第三は、ともに「公媽牌」と呼ばれ、現在の台湾ではこの両型が多い。なお、記入される名は男の祖先のものだけで、各々の妻は夫の下に「妣△氏」と姓だけが記される(堀江 1989: 175-176)。

台湾の祖先祭祀の特徴として、①父系子孫による祭祀、②父系子孫の協同的關係による祭祀、③一定期間がすぎても祖先融合体になるのではなく、個性を保ち続ける、④女性は婚家でのみ祖先として祭祀されるという点が挙げられる。

## 3 台南教会の事例からみた双系の先祖と総戒名に対する態度

このように、台湾では父系の祖先に対する祭祀であり、父系男性子孫の協同關係による祭祀で、兄弟が集まって行われる。したがって、父方(夫方)と母方(妻方)の双系の先祖の祭祀をする手がかりとしての佼成会の総戒名について

は、極めて抵抗がある。また兄弟が集まって祖先祭祀を行うため、位牌が自宅にある人にとっては、仏壇に総戒名を祀ることはできない、もともと位牌に祖先がいるのに、総戒名をいれて二つ並ぶのはよくないとも述べる。また額装本尊は絵像の本尊の写真、総戒名、法号(開祖・脇祖)、宅地因縁がセットになっているが、総戒名ばかりでなく、いくら教団の創立者であるとはいえ、他人の名前である法号を祀ることも台湾ではありえないことであるという。宅地因縁については受け入れられている。

総戒名の祀りこみがなぜ難しいかについて、台南教会の前理事長(2017年訪問時)のAさんと当時の理事長のBさんの語りからみてみよう。彼らの妻は「主任」(教会長-支部長-主任という役のライン)である。また理事長という重要な役についていながら、(日本では入会の基本要件である)総戒名の自宅への祀りこみは受け入れられないことについて、以下のように述べている。なお台北に比べ台南の方が伝統的といわれている。

Aさん(男, 1937年生, 当時80歳, 大卒, 2003年入会)は妻の姉夫婦が佼成会に入会していたので、その関係でまず妻が入会し、車で妻の教会への送り迎えをしているうちに、2003年に妻からの導きで入会した。また、妻の姉夫婦から佼成会に話を聞きに来ないかと誘われ、当時、教会では書道教室をやっていたので、習字を習いにいった(当時は日本語教室と書道教室を開催)。理事長の役は2013年から4年間つとめた。

総戒名の自宅への祀り込みはしていないが、その理由についてAさんは以下のように語る。「台湾の風習では祀るのは夫のほうで妻方は祀らない。まして、兄弟と同居(大きなビルの各階ごとに兄弟が居住)しているのに、妻の先祖を祀ることは不可能だ。自宅のリビングに大きな仏壇がある。位牌は歴代の祖先の位牌で、後ろに9個の個人の位牌が入る。そこに集まって祖先祭祀をするので、総戒名を祀ったら他の兄弟にわかってしまう。また、嫁に行った娘に祖先を見てもらふ筋はない。2011年に庭野日鑛会長が台南教会にいらした時に総戒名が

入った額装本尊を配るということだったが、総戒名は受け入れがたいので、額装本尊から本尊像の写真を抜き出して、そのみを配った。」

Bさん(男, 1949年生, 当時67歳, 大学院修士課程修了, 妻の導きで十数年前に入会)は2017年当時, 台南教会の理事長をつとめていた。仕事をしていた時は佼成会にはこれなかったが, 定年になり, 時間ができたので理事長の役を引き受けた。それ以前は理事会の秘書長や壮年部長の役についたことはある。Bさんは総戒名や双系の先祖供養について, 次のように述べる。「佼成会で一番違和感があるのは総戒名だ。また額装本尊の中の写真の本尊, 総戒名, 開祖・脇祖の法号にも違和感がある。自分の場合, 長男であり, 家の仏壇は自分だけのものではない。兄弟が来て拜む。仏壇には観音菩薩を祀ってあるので, (佼成会の)釈迦牟尼仏の本尊を勧請できない。額装本尊があると兄弟が拒否するので, それはできない。特に総戒名と法号は難しい。自宅には庭野日鑛会長が台南にいらした時にいただいた写真の本尊はある(額装本尊の一部)。開祖・脇祖の法名を書いた法号を受け入れることが難しいのは, 自分が受け入れられないのではなく, 息子や兄弟のことを考えると安置するのはとんでもないことだ。祖先以外に他人を祀ることはありえない。宅地因縁は台湾でもそれに似たようなものがあるので, 納得できる。台湾の風習では自分の家を守ってくれる神様がいる。額装本尊は台湾人にとっては一般から見ると受け入れられないものである。」

二人の理事長体験者は, 妻の導きで, また定年後に時間の余裕ができた時に理事長という役職についた(規約上最大で2期4年)。理事長といっても必ずしも熱心に信仰活動をしていたわけではない。総戒名の祀りこみは妻の一存ではできず, 夫の意向が重要になるが, 理事長という役職者でも祀りこみはできていない。両者は長男で, 自宅に祖先の位牌を置いている。総戒名(または額装本尊)を安置できない理由として台湾の祖先祭祀は兄弟の協同でやるのでその理解がないと祀りこめない。長男のところに兄弟が集まって祖先祭祀をするの

で、なぜ妻方を祀っているのかと言われるという理由をあげ、台湾の祖先祭祀は父系であること、そして男性子孫による協同祭祀であることに言及する<sup>(5)</sup>。

このように、台湾では父系の祖先に対する祭祀であり、したがって、父方(夫方)と母方(妻方)の双系の祭祀をする佼成会の総戒名については台湾の祖先祭祀とは異質で、極めて抵抗がある。また兄弟が集まって祖先祭祀を行うため、自宅の仏壇に総戒名を祀ることについては他者の目も意識している。もともと位牌に祖先がいるのに、総戒名をいれて二つ並べるのはよくないという考え方もある。額装本尊は絵像の本尊像の写真、総戒名、法号、宅地因縁がセットになっているが、総戒名ばかりでなく、他人の名前(法号)を仏壇におくことも台湾ではありえないことであるという。男性は特に父系の祖先祭祀を強調し、自宅に位牌のある場合はことに忌避感が強い。

しかしながら、一部ではあるが、総戒名を祀っている家がある。Cさん(女、2012年時当時74歳、1987年入会、主任)は古くからの会員である。仏壇には左から台湾式の位牌、佼成会の宅地因縁・総戒名(右に夫の姓・左に妻の姓)、佼成会の本部勧請の本尊像、観音像がおかれている(写真6、写真7)。なお、写真7にみるように、この事例は台湾の位牌も両家に書き換えている特殊例である。夫は蒋介石の国民軍と一緒に一人身で台湾に来た外省人で、Cさんと結婚した。夫は温厚で優しい性格で、家の決定権は妻であるCさんに委ねているとのことである。本部で本尊(像)を勧請した時(1994年)に、夫の同意を得て祖先の位牌を佼成会式で両家を祀るようにした(写真をみると両家に書き換えた跡がある)。これはめったにないケースである。またCさんは仏壇に向かって朝夕読経供養もしている。

このような例外的な事例を除いて、総戒名に忌避感があるが、他方、日本語世代の場合は総戒名を自宅に祀っていた様子である。日本語世代で古くからの会員のDさん(女、1931年生、1983年入会)も総戒名を祀っている。Dさんは7人姉妹で、姉とDさんの二人は日本に医学の勉強のため留学し、日本人と結婚し



写真6 台南教会のCさん宅の仏壇 [筆者撮影]  
左から台湾式の位牌, 佼成会の宅地因縁・総戒名, 佼成会の本尊像, 観音像がある。



写真7 台湾式の位牌と総戒名・宅地因縁 [筆者撮影]  
右は佼成会の宅地因縁と総戒名。総戒名の王は夫の姓, 陳は妻の姓である。位牌には王と陳の双方の姓が刻まれている。父系の姓から双系の姓に修正したあとがある。

た叔父の元に行くようにと言われ、1941年の4月に日本に行ったが12月に太平洋戦争が起ったため帰れなくなり、小学校3年から中学2年までの6年間日本に滞在した。台湾にいた時も日本語教育を受けており、台湾に帰ったら台湾語はできない、北京語はもっとわからなかったという。23歳の時に見合い結婚し、長女、長男、次男、次女(現在の台南教会長)がいる。夫は1979年に52歳の時に亡くなり、その後Dさんは夫の残した工場を経営し、佼成会にも入会した。Dさんは母を導いたが、娘ばかり7人で祖先を祀る人がいなくなるので、母は佼成会では両家を祀れることを知り、喜んだという。Dさんも実家の先祖も祀れることはうれしかったと語る。Dさんが入会したのは夫の死後であり、総戒名を祀ることに問題はなかった。

信仰二代目のEさん(女、1964年生)のところは義父が亡くなったので、総戒名を受け継いだ。Eさんの夫は次男である。同じく二代目のFさん(女、1960年生)の家にも父が祀った総戒名があった。総戒名には両家のみならずかつて同居していた弟である長男の妻の両親の姓も入っていた(写真8, 写真9, 写真10)。しかし、父が亡くなってから、弟の息子たちにいろいろと事件がおき、弟の妻からはずしてほしいとの依頼があり、その後両家のみに書き換えてもらったが、現在は総戒名を祀っていないという。

#### 4 額装本尊安置を推進する台北教会の事例とその経緯

父親が佼成会の台北布教のルーツになった、現在台北教会の教会長である簡妙芳(女、1956年生)は額装本尊の安置を推進している。筆者が調査に訪れたのは2012年と2017年であるが、2012年の調査当時、教会長は額装本尊の安置を推進し、これによって教会の世代交代を図りたいという意図をもっていた。2012年に筆者は、2軒の家の額装本尊の安置式に参加した。そこでの観察と聞き取り調査から総戒名や額装本尊に対する意識をみていきたい。2012年8月の時点



写真8 台南教会のFさん宅の日本語世代の仏壇 [筆者撮影]

左に台湾式の位牌, 中央に佼成会の本尊像, 位牌の上のガラスのところに総戒名と宅地因縁がはってある(写真9と写真10はそれを拡大したもの)。



写真9 宅地因縁と総戒名 [筆者撮影]

総戒名は右から父方の姓の陳, 母方の姓の殷, 息子の妻の父方の姓の郭, 母方の姓の楊の4つが書いてある。

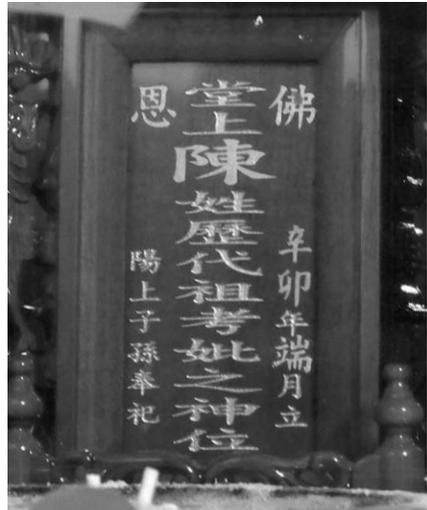


写真10 台湾式の位牌 [筆者撮影]

中央に「陳姓歷代祖考妣之神位」とある。

では額装本尊を安置したのは6家であった。

教会長は繰り返し、なぜ両家を祀るのか、双系の先祖の意義について伝えていくという。自分が存在できるのは誰のおかげか、父ばかりではなく母のおかげではないのか。母がいないと生まれてこない。単にお祀りするだけではなく、歴代の先祖に感謝の意を表するものであると説明している。以前は母方(妻方)を祀ると悪いことが起こると言われたこともあるが、何度も歴代の先祖に対する感謝の意義を説いたという。

2012年当時は、額装本尊の安置によって世代交代も図ろうとしていた。本部勧請本尊像を拝受している家にも法号の入っている額装本尊の安置を勧めていると語っていた。しかし2017年に調査に訪れたところ、額装本尊の安置はなかなか進んでいなかった。2017年には総戒名の説明について、この言説に加えて、「総戒名は台湾の伝統的な位牌ではない。ここは先祖の道場で、歴代の先祖をここに呼んできてお経を聞いてもらう場」としての説明もしていた。そのように説明すると父方母方にこだわらず、もっと総戒名に入れる姓を増やす人もいた。いくら苗字を足しても大丈夫だと言っているとのことである。

2012年8月に訪問した時に、台北教会の理事長のGさん(男、62歳、1982年入会)宅で額装本尊の安置式が行われた(写真11)。教会からマイクロバスを出し、21名が参加した。Gさん宅のリビングには観音菩薩、閻帝や土地公を祀った仏壇がある。Gさんは旅行会社を営んでいるので商売繁盛にご利益があるという閻帝や土地公の像を安置している(写真12)。今回、そことは別に額装本尊を祀るための仏壇を新規につくった(写真13)。Gさんの入会は1982年だが、教会に出るようになったのは比較的最近であるという。Gさんは1979年から旅行会社を営み、佼成会への団体参拝を引き受けていた。理事長には1年半前になった。理事長という立場での教会長の説得によるものかもしれないが、Gさんの家には位牌はみあたらず、また、従来の仏壇とは別の場所に額装本尊の安置場所をつくったので、その点は受け入れやすい側面があったのではないか

と思われる。

Gさん宅の安置式に参加していたHさん(男, 56歳)は友人に誘われて2010年に入会し, 2012年6月に額装本尊を安置した。総戒名に三家の姓を入れている。実父と離婚して母が再婚したので, 実父の姓, 育ての父の姓, 母の姓の三家である。双系の先祖については男女平等でよいと思うと語る。台湾の伝統的な宗教観では, 女性の家の先祖は祀れないが, 佼成会の場合は両方が祀れるのはよいと思うと語る。しかし, 10年前に亡くなったHさんの母は霊友会(双系の先祖供養を説く。佼成会は霊友会からの分派教団)に入会していたので, 双系の先祖についてはなじみがあり, 男性としては例外的といえるかもしれない。Hさんの母は生前熱心な霊友会の会員であった。Hさんは母に連れられて霊友会に行ったことはあるが, 本人は霊友会の活動はしていない。佼成会の役はないが, 月に5日は土日に教会に行くという熱心な会員である。

Iさん(女, 75歳, 副主任)宅でも, Gさん宅の祀り込みの翌日に額装本尊安



写真11 台北教会理事長のGさん宅での総戒名の安置式 [筆者撮影]  
左側に写っているのは新しく作った額装本尊用仏壇, 中央奥は従来の仏壇。



写真12 Gさん宅の仏壇 [筆者撮影]  
中央に観音像、右は閻帝(閻羽)像、左は土地公の像。  
閻帝も土地公も商売繁盛のために祀られている。



写真13 Gさん宅の新しい仏壇に安置された額装本尊 [筆者撮影]

置式があった。教会からは15名が式に参加した。リビングのテレビの隣に額装本尊を安置する棚をつくった。しかし、リビングはくつろいでリラックスする場所なので、仏さまが見ているのはバツの悪い感じがするとも述べていた。額装本尊の総戒名には、三つの姓が入っている。右から妻のIさんの姓、夫の姓(婿養子)、Iさんの母の姓である。向かって左にあるのは、Iさんの母の台湾式の位牌である。母は内縁の妻という立場なので、戸籍に入っておらず、内縁の夫のところの祖先として祀られないが、総戒名の意味をよく理解したので、総戒名にもIさんの母方の姓を入れたという(写真14、写真15)。

2012年5月に額装本尊を安置した人に、Jさん(女、48歳、1995年入会、2013年から総務部長)がいる。Jさんは理事長Gさんの妻の妹である。Jさんは総戒名について台湾の文化風習と違うと述べる。「台湾では夫の家の蘇だけを見ている。実家の林の先祖の名前はない。子どもは娘一人しかいない。娘が嫁いでいけば、蘇も林もなくなる。伝統的な祖先祭祀では、娘が嫁いで祀る人がいなくなった時には、寺に頼んで永代供養をする。夫に両家を祀り込んでよいかと聞き、よいと言ってくれたので、額装本尊を安置した。夫の気持ちが変わらないか心配で唱題(南無妙法蓮華経)を10万回をあげた」という。なお、総戒名を受け入れやすかった理由として、夫は次男で、夫の兄である長男が離婚し、独り身で位牌を継承できない、受け継ぎたくないとのことで、義母はすでに位牌を寺に納めていたことがあげられるのではないと思われる。

Jさんは他者にも額装本尊の安置を勧めている。双系の説明についてはお父さんの精とお母さんの地があるからこそ、今の自分が生まれてきている。父母の二人がいないと今の自分はない。祖先というのは父方だけではいけないと他者にも説明するが、それに対して絶対に父系だけだ、息子が受け継いでいくと反論する人もいる。母方の先祖を父方の先祖と一緒に祀ることはありえない。母方の先祖を祀ってはいけないのに祀ってしまうと霊が要求してくる。年輩の人(特に男性)は台湾の昔からの文化があるので、いくら討論しても考えは変わ



写真14 台北教会のIさん宅の額装本尊と個人の位牌 [筆者撮影]  
左端は母親の台湾式の個人の位牌。中央は額装本尊、右は観音像。額装本尊には右から妻の姓の呉、夫(婚養子)の姓の周、呉の母の姓の詹の三家の姓が入っている。



写真15 額装本尊安置式に供えた食べ物とテレビの隣の棚に安置された額装本尊 [筆者撮影]

らない。Jさんは女性の方が説明をわかってもらえそうだという感覚を持っている。台湾も少子化で子どもに男子がいない家族も増えているが、跡継ぎの子どもがいない時は位牌を寺に持って行って預ける。(日本でいう)「家」のようなものには台湾の人は執着がないという。

Kさん(女, 1962年生まれ, 55歳, 1995年入会, 若手の主任)は2012年の調査時は額装本尊を安置していなかったが, 2013年に額装本尊を安置した。2017年の調査では, 教会長からずっと祀り込むように言われ続けてきて, 夫はいらない, 自分も必要ない, 拝みたいときには教会にいけばよいと思っていたが, 教会長が言い続けてくるので4年前(2013年)に祀った。家には位牌はなく, 夫の父母の家も位牌はない。このように教会長の説得によって安置するに至ったと述べる人もいる。

2017年の調査ではLさん(女, 74歳, 主任・理事)は, 日本ではより上位のものだとされる本部勧請の本尊像と守護神を拝受しているが, 総戒名は安置していない<sup>(6)</sup>。「夫がキリスト教徒なので総戒名を祀ることができない。台湾の伝統で先祖は男性が代々受け継ぐもので, 女性のほうは入れてもらえない」と述べる。総戒名を人に勧めたことはあるかの問いに対して, 「勧めたことはない。絶対受け入れられない。受け入れられるとしたら子どもが娘しかいない家なら受け入れるかもしれない。先祖供養を台湾で布教に使うのは難しい」と語っている。

2012年時点では教会長は額装本尊の安置を推進したいという気持ちが強かったが, せいぜい1年に1家あるぐらいで, 2012年には6家, 5年後の2017年は10家, また2021年時点でも14家でなかなか安置をするのは難しい状況にある。

## 5 日本在住の台湾人スタッフからみた台湾の祖先祭祀と佼成会式先祖供養

筆者の台湾での調査の時に通訳をしてくれ, また佼成会の国際伝道部でのス

スタッフであるMさん(女、1966年生、台南生まれ台北育ち、現在は日本に帰化)に祖先祭祀の文化のある台湾で、総戒名や額装本尊がなぜここまで受け入れられにくいかについて尋ねた。

仏壇があるのは親と同居している古い家で、そこには自分の信仰している菩薩または神を通常一つ祀る。観音菩薩が多く、寺から分けてもらう。一般の家では釈迦牟尼仏は祀らない。釈迦牟尼仏は偉すぎるので、寺でしか祀れない(佼成会の本尊は釈迦牟尼仏)。横に祖先の位牌を祀る。位牌の中に故人の名前が書いてある木札が入っている。台湾では個別の霊は先祖代々として集合することはない。位牌は基本的に長男のところであり、長男が亡くなった時は今後位牌をどうするかを兄弟で話し合う。仏壇への祭祀物は自分がよくても一族の理解をえないといけない。

跡継ぎがない人は寺に位牌を持って行き祀ってもらう。永代供養のように、お金を払う。寺に納めていたほうが毎日お経をあげてくれるので寂しくないという考え方もある。年輩の人も子どもに迷惑をかけたくないので、寺に祀ってもらうていいという人もいる。現在は未婚の人は(冥婚をしなくても)寺に行けば永代供養をしてもらえる。

嫁に行ったらその家の人間になりきることが求められる。嫁の祖先の位牌を嫁入り先に持っていくというのはできない。昔は結婚して子供がいなくて大変な立場になり、男子を産まなくてはならないという圧力は強かったが、この頃は子どもで苦勞する、自分の生活を大事にしたいということで考え方も変わってきている。親も男子を産まないといけないというさく言わなくなった。

総戒名と額装本尊については、抵抗を感じる人々がほとんどである。なぜ額装本尊がいやなのかという理由は、総戒名については台湾の祖先祭祀は父系であり、母方(妻方)を祀る習慣がない。もともと位牌に先祖がいるのに佼成会の総戒名と二つ並ぶのはよくない。また父系男性子孫が協同して祭祀するので、個人の一存で祀ることができない。母方を祀るのは怖いというより習慣がない

が、台湾では諸精霊はよくないもの、どんな死に方をしたかわからないので、あまり余計なことをすると運が悪くなったり、悪いことが起こると思われる。

額装本尊の本尊は絵像の写真である。台湾では神仏は像なので、額装本尊にある絵像の写真は紙一枚にみえる。仏像だと仏様を感じるが、写真には神聖性を感じにくい。庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖の法号はいくら創立者と言っても自分の(父系の)祖先ではなく他人なので、その法号を安置することについて違和感がある。宅地因縁についてはあまり抵抗がない。

総戒名だけはできないという人がある。両家を祀るのは難しい。しかし、若い人達、親と住んでいない人は受け入れる可能性があるかもしれない。しかし、何か悪いことがおきたら違うものを祀ったからではないかと思う。このように佼成会の入会時の信仰の手がかりとしての基本的な装置が、台湾での祖先祭祀の文化と葛藤し、受容が困難なのである。

## 6 日本語世代がいた時代の総戒名の受容

台湾の立正佼成会の展開過程を別稿で跡付けたが、日本語世代がいた時は総戒名について抵抗はなかったという証言がある(渡辺・廣瀬 2021:153)。現在、総戒名やそれが含まれた額装本尊の安置に困難を感じている台北では、1980年代は東京の豊田教会系統の法座所との位置づけで、毎月のように豊田教会から支部長と主任の2人がペアで布教支援に来た。導きも法座も活発で入会者があるたびに、豊田教会で総戒名を書いて持参した。また、豊田教会の元教会長からの聞き取りでは、当時は総戒名を安置することに抵抗はなかった、日本で説くのと同じように、両親がいて、その両親にもまた両親がいて今の自分がある、連綿と続く命への感謝と説明したと述べている。ただし、総戒名を貼る台紙を白ではなく、赤地にしてほしいとの依頼はあったとのことである。

かつての佼成会についても知っている台北教会長によると、日本語世代が総

戒名を受け入れたことについて、日本語世代は日本語が分かり、総戒名の意義を理解し、素直な人が多かったのではないかと述べる。当時は佼成会でこうやりなさいと言われると素直にやった。信仰心があり、総戒名、本部勧請本尊、本部勧請守護神というように、(総戒名なしに本尊や守護神を勧請するようなことはなく)素直に順序を踏んでやっていた。また、自宅に総戒名を安置するにしても自分で決められる立場の人が多かった。会員には女性が多かったが、女性でも自分で稼いだお金や財産をもっており、経済力があつた。性格的に気の強い人が多かったのではないかとのことである。また、当時の人には母方や自分の実家の先祖を祀れることに惹かれた人もいた。台南においても日本語世代は総戒名を受け入れていることから、日本語世代とそれ以外ではメンタリティが違うのかもしれない。

## おわりに——台湾と韓国での総戒名受容の困難の諸相

東アジアでは祖先祭祀が文化としてある。ところが、佼成会式の先祖供養の手がかりとなる父方母方(夫方妻方)の両家の先祖すべてを象徴する総戒名が、現地での受け入れにあたって困難をかかえている。なお、佼成会では祭祀というより、読経供養が重点になる。

本稿では台湾の場合を扱ったが、筆者は韓国の佼成会も調査し、韓国における佼成会式先祖供養、特に総戒名にかかわる困難について考察した(渡辺2019:77-90)。韓国では儒教式の祖先祭祀があり、また、台湾と同様に、双系の先祖を祀る総戒名への葛藤があつた。しかしながら葛藤の所在が、台湾と韓国では異なっている。

韓国の儒教式祖先祭祀では、子どもを残した男子という、一定の資格を持ったものだけが神になる。また、儒教の祭祀者の特徴は徹底した男性中心の集団であり、直系主義による長子・孫中心であることで、儒教の祭祀は原則的に男

性のみが参加を許されており、父系親族・血族によって行われる。祖先祭祀に関しては、第一に、韓国では儒教による祖先の祭祀を大切にすることが、仏壇に相当するものではなく、家に先祖や神仏を祀る習慣はない。儒教式の祖先祭祀(チュエサ)は長男の家で行われ、チバン(紙の位牌)を書いて祭壇をつくって供養し、法事が終わったあとでそれを燃やして片づける。したがって、祖先の位牌を残して祀るという習慣がない。そこで、なぜ形として祀らなくてはいけないのか、まして長男が祭祀をしているのに、なぜ自分がしなくてはならないのかという問いが出る。第二に、鬼神に対する恐れがある。自宅に先祖の霊を祀ると、魔が入る、鬼神が入る、鬼神を呼び寄せて祟りがあったらどうするかと言って怖れるのである。今までやってきていないのに、放っておいたらよいのに、なぜ静かに眠っている霊を呼び起こすのか。家にそのようなものを祀ると祟りがあるので怖い。また、なくす時も怖いというのである。このような文化的背景のもと、自宅に総戒名を安置することが忌避されるのである。

このように、韓国では仏壇がなく、家に安置する習慣がない。家の中に先祖を祀るといふと、鬼神、すなわち魔が入るということで、なかなか安置できない。台湾との大きな違いは、台湾には仏壇と祖先の位牌があるが、韓国では祖先祭祀ごとに紙でつくった位牌を用い、祭祀が終わったら燃やしてしまうことで、また自宅にも仏壇に類するものはない。

個人宅に総戒名を祀ることの抵抗感を減じる方策として、韓国佼成会では教会にある戒名室で個人宅の総戒名を預かるという方法をとっている。戒名室とは、戒名をつけたり、追善供養等をする部屋である。そこには引き出しのある箱があり、各自の総戒名はそこに封筒に入れて納められており、追善供養や総供養の時は出して供養する。これは韓国独自のやり方である。自宅に安置することは難しいが、総戒名を祀り込んで、戒名室に安置するという事は受け入れられ、そこでの追善供養は頻繁に行われている。

先祖を祀ったら家の中がゴタゴタするのではないかという問いに対して、「な

ぜ私たちの先祖が鬼神なのか、自分が死んだら先祖になるが、鬼神とか悪魔とか言われたら納得するのか。家の中に先祖を祀ったら魔が入るというなら、なぜチェサをやるのか。佼成会では霊(鬼神)がきたら、単にそれを放りだすのではなく、ご供養し、感謝の気持で、安らかにすることによって成仏させ、守護霊と変えることができる」と説いている。

それでは、父系血縁社会での双系の先祖供養の説得はどうか。総戒名に父方(夫方)母方(妻方)双方の先祖を祀る佼成会の先祖供養は、父系血縁を基本とする韓国社会とは異質のものを含んでいる。韓国では、個人は原則として出生と同時に父親の姓を名乗り、その親族集団への帰属が生涯にわたって社会生活全般に及ぶ個人の最も基本的な資格になっている

佼成会の双系の先祖供養については、次のような説明をする。「子どもは、父親の血ばかりでなく、母親の血もつながっている。それは科学的にも説明されている」。韓国の風習は長男がその家の先祖を祀るので、自分たちは次三男で、長男が先祖の祭祀をしており、命日には(チェサに)長男の家に行って祭祀に参加しているので、しなくてよいという人には、「それは儒教のしきたりだが、佼成会という先祖供養はお経をあげて先祖の成仏を願うのであるから、子どもの誰がやってもかまわない。息子でも娘でも、これは親孝行をする方法の一つである」と述べる。女性の中には、実家の母の供養をしたかった、実家も一緒にご供養してもらえたいのがありがたいという人もいる。現在では、双系の先祖の概念も受け入れられ、女性にとっては実家の先祖を供養できるということは魅力でもある。

佼成会の先祖供養が説得性を持つ背景には、韓国社会の変化がある。まず、以前は長男が財産を一括相続して、長男が親の面倒をみ、扶養することになっていたが、今は財産を子どもの間で分配することになった。そして、韓国社会において、核家族化、少子化、子どもが女子ばかりで男子がいない家族、長男が跡をとらない、そして、長男がキリスト教の信者になったので、法事や命日

の供養といった祖先祭祀をしなくなった、長男がアメリカに行っている、未婚者の増加など、家族をめぐる変化がある。こうしたここ10年ほどの間に起きた時代の変化の中で、佼成会の先祖供養が受け入れられる素地が拡大した。

韓国の場合、一番受け入れにくかったのは、自宅に総戒名を祀ることであった。それを教会の戒名室にあずかり、戒名室に保管するという方便で解決し(幹部の場合は自宅に祀る)、内実をとることができるようになった。戒名室で追善供養をすることは現在では違和感なく受け入れられている。台湾は伝統的に父系の祖先に対する祭祀であり、また父系男性子孫の協同関係による祭祀である。韓国では紙の位牌を祭祀が終わったら燃やしてしまうのとは異なり、台湾では仏壇があり、神仏とともに位牌が安置されている。韓国では幹部会員は自宅に総戒名を祀り込み、朝夕読経供養をしている。また、戒名室での追善供養も定着した。しかし台湾では、教会で皆一緒にあげる読経供養についてはよいものだと評価する人が多いものの、自宅で読経供養している人は少ない。幹部会員でも家に経典がない人もおり、道場当番で教会に来た時に教会でお経をあげる人もいるという。台湾では寺廟への参拝は頻繁に行うが、お経は寺であげればよいという考え方で、その場その場で完結して簡単にする。自宅に安置すれば責任があり、負担がある。また、佼成会では先祖に毎日飯水茶をあげるが、台湾では祖先に御飯(ほかの食べ物)をあげるのは年に4回(清明節、春節、中元、冬至)の祭祀の時だけである。また、読経供養の対象は先祖ではなく、教会の本尊の釈迦牟尼仏や観音菩薩に対してである。台湾では祖先は供養するものではなく、祭祀するものである。(見た感じは日本と同じように教会で読経供養しているようにみえてもその対象は先祖ではなく、仏に対してである。)

陰陽の問題を台湾人は気にする。生きている人間は陽だが、亡くなった人は陰である。家で読経供養すると無縁仏や鬼神などが寄ってくるので、鬼にとりつかれたり、不幸が起きたり、悪いことが起きる可能性があると思われる。自宅での読経は陰の人を呼び起こすので怖い、毎日陰の人を呼び起こすのかと

言う人もいるという。また、祖先も含め亡くなった人の陰の気が集まるので、生きている人に悪い影響を及ぼすとされる。台湾では祖先への回向ということはわかっているが、回向は読経供養ではなく、あの世の祖先に物質的なものとお金(紙銭)をあげることである。祀る者がいない死者の霊に対しては、中元節に施餓鬼をする。それも祖先に対しては昼、祀る者のいない鬼には夕方とそこでも陰陽の考え方がみられる。

台北教会では追善供養はほとんどやっていない。台南教会では韓国佼成会のやり方にならって戒名室での追善供養を試みたが、お経をあげていると霊が寄ってきてそうで怖いという話が出て取り止めになったという。

かつては台湾の漢人社会では男性子孫をもうけ、その子孫が祖先祭祀を行うことが当然とされてきた。男性は結婚し、男子を得ることでそれが可能となった。また女性は婚出し、そこで男子を産み、夫側の祖先祭祀を継続させ、自分を祭祀する者を確保してきた。しかし、台湾社会では少子化と未婚化が進んでおり、男子が祖先祭祀を継承することを一層困難にしている。昔は伝統的には男子の均分相続で、女性は財産をもらえなかった。今は法律的には平等になったが、今でも父系男性子孫が祖先を祀るという観念は強い。とはいえ、位牌の継承者が亡くなった時には兄弟で話し合うことは基本だが、現在は位牌を寺に預けることもよく行われている。また、土葬ではなく火葬になったので、寺にはロッカー式納骨堂もある。寺に預けると、これまでやっていたことを寺に任せればよいので、簡単に済ませられる。年に4回お参りにいけばよい。こうした社会状況の変化はあるが、それによって父系から双系の先祖観の受け入れとは結びつかない。現状では台湾社会の変化に応じて状況適合的に父系の祖先祭祀を継続しながら、そこに受け入れ媒体としての寺がかかわっている状況にあるように思われる。韓国の事例、台湾の事例ともに、祖先祭祀の強固な宗教文化のあるところは、むしろその土地の概念ややり方が強固なため、佼成会式先祖供養は受け入れにくいということがある。ただし、台湾の場合、それに加え

て日本語世代とそれ以降の世代という受容の仕方の文化的差も加わっていることも指摘できようし、どのような工夫によって可能になっていくのか、ならないのか、という点については今後を待ちたい。

## 註

- (1) 洪郁如は、一般的な認識において台湾の戦前世代と「日本語人」は常に等号で結ばれてきたが、戦前の台湾社会では日本語と無縁な「非日本語人」が大多数を占めたと指摘している。「日本語人」と「非日本語人」の間には階層的に差があり、日本統治下の台湾では、エリート層と民衆層の経済的分化と同時に階層間の文化的分化も進行しており、教育機会の有無は集団ごとに異なる歴史的経験と歴史認識をもたらした。日本教育の多寡が台湾人の社会階層のシンボルとして機能し、そして日本語の使用は識別の身体的記号ないし、表現になっていた(洪 2021 : 6-7)。

このことに関しては、聞き取り調査によると、佼成会の日本語世代は資産がある人ということであり、佼成会の受容層である日本語世代というのは比較的裕福な階層であるとみてよいと思われる。

- (2) この「像」については、後述する額装本尊の写真はありがたくない理由の一つである。また釈迦牟尼仏は寺に祀られているが、自宅では恐れ多くて通常祀らない。
- (3) 韓国の場合は反日感情を惹起しないように、意識的に日本性の希釈を行っているが、台湾はこの意味でのものではない。
- (4) 少子化社会になった現在の台湾では、近年は変わってきた。老後の面倒をみてくれる娘を望む場合もでてきた。位牌を継ぐ男子がいない場合は位牌を寺に預ける。そのあたりはあっさりしているという。
- (5) 仏間があるのに、人目につかないように、たとえば寝室に総戒名や額装本尊を安置するなどということはいえないうことである。
- (6) 台北教会長によると台北の佼成会の基礎をつくった簡の父の時代は、全部説明して総戒名を祀り、理解して修行して本尊(像の本部勧請本尊)をいただくというやり方だった。ある時から導きの人数で本尊勧請をするようになり、総戒名を安置していなくても本尊を勧請するようになった。はっきりとは言わなかったが、1993年に台湾教会がおかれ、日本人教会長が派遣された時代のことであると思われる。

## 参考文献

- 朝倉敏夫 1989, 「韓国の祖先祭祀と社会組織」, 渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社, 41-64。  
朝倉敏夫 1989, 「韓国の位牌祭祀」, 渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社, 121-143。

## 台湾における立正佼成会式先祖供養の抱える困難

- 植野弘子 1989, 「台湾漢人社会の祖先祭祀——家族と宗族の祭祀をめぐって」, 渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社, 95-118。
- 植野弘子 2011, 「父系社会を生きる娘——台湾漢民族社会における家庭生活とその変化をめぐって」『文化人類学』75-4, 526-550。
- 植松明石 1989, 「台湾における死者の靈魂と骨」, 渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社, 448-475。
- かみずるひまひこ  
上水流久彦 1998, 「宗教」, 若林正丈編『もっと知りたい台湾』第2版, 弘文堂, 69-85。
- 洪郁如 1998, 「女性たち」, 若林正丈編『もっと知りたい台湾』第2版, 弘文堂, 86-100。
- 洪郁如 2021, 『誰の日本時代——ジェンダー・階層・帝国の台湾史』法政大学出版局。
- 堀江俊一 1989, 「台湾の位牌祭祀」, 渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社, 172-192。
- 吉原和男・鈴木正崇・末成道男編 2000, 『〈血縁〉の再構築——東アジアにおける父系出自と同姓結合』風響社。
- 若林正丈・劉進慶・松永正義編 1990, 『台湾百科』大修館書店。
- 渡辺雅子 2019, 『韓国立正佼成会の布教と受容』東信堂。
- 渡辺雅子・廣瀬幾世 2021, 「台湾における立正佼成会の展開」『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』157号, 131-224。
- 渡邊欣雄 1989, 「祖先祭祀」, 渡邊欣雄編『祖先祭祀』, 凱風社, 11-38。
- 渡邊欣雄 1991, 『漢民族の宗教』第一書房。

### 付記・謝辞

台湾の現地調査は2012年8月と2017年8月に実施した。2021年11月には台北教会長にスカイプを用いて補足の聞き取り調査を行った。そのほか、日本で担当者からの聞き取り調査を随時行った。

調査に際しては、台北教会教会長の簡妙芳氏ほか台北教会の方々、台南教会の元教会長蔡麗金氏、前教会長廣瀬幾世氏、現教会長の胡利安氏ほか台南教会の方々、そして通訳をくださった国際伝道部元スタッフ(中国支教区教務員)竹野貴則氏、国際伝道部スタッフ矢島希和子氏にお世話になった。感謝の意を表するものである。